

生涯学習と初修外国語：面接授業「初歩のフランス語」の教材制作と全体構想

著者	工藤 庸子, 笠間 直穂子, 南 玲子, 郷原 佳以
雑誌名	放送大学研究年報
巻	23
ページ	51-63
発行年	2006-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007474/

生涯学習と初修外国語

—面接授業「初歩のフランス語」の教材制作と全体構想—

工藤庸子¹⁾・笠間直穂子²⁾・南玲子³⁾・郷原佳以⁴⁾

Formation permanente et cours de langues étrangères pour débutants

—conception générale du cours de « français élémentaire » et création
des nouveaux outils pédagogiques—

Yoko KUDO, Naoko KASAMA, Reiko MINAMI, Kai GOHARA

Résumé

Le but du cours de « français élémentaire », créé en 2005, est de permettre aux débutants d'acquérir, en cinq leçons, les principes de base de la prononciation du français, et de leur donner la possibilité de s'exprimer dans cette langue au moyen de phrases simples. Nous avons aussi pour objectif de développer un « enseignement ouvert sur la société, l'histoire et la culture » de l'Hexagone, en présentant à nos étudiants non seulement la France elle-même, pays qui devance de loin le Japon en matière de réception des cultures étrangères, mais aussi l'ensemble du monde francophone. Nous tâcherons par ailleurs de compenser le caractère magistral du cours télévisé en communiquant activement avec les étudiants lors des classes. Nous pourrions également être amenés à modifier le contenu des cours en fonction des centres d'intérêt des étudiants ou encore de l'actualité.

En accord avec cette conception nouvelle du cours, nous avons mis au point des outils pédagogiques originaux. Il s'agit de matériaux de base destinés à toutes les classes de « français élémentaire », à partir desquels chaque chargée de cours peut développer librement son enseignement. Nous avons ainsi réalisé un fascicule photocopié de six pages illustré de nombreux dessins et photos en couleurs, auquel nous avons joint un CD qui permettra aux étudiants d'écouter, dites par un professeur français, les expressions contenues dans le livret. Le tout a été conçu en fonction du plan adopté pour le déroulement des cours. Les deux premiers cours seront consacrés à l'enseignement de la prononciation et de l'alphabet ; les leçons suivantes étant organisées autour de trois thèmes, respectivement : « Paris », « la France », et « la francophonie ». Nous nous sommes partagé la recherche des documents concernant chacune des régions traitées dans le manuel.

Pour l'utilisation concrète des outils pédagogiques, vous vous reportez aux rapports rédigés par les chargées de cours du premier semestre 2005.

Lors du premier et du dernier cours, nous avons effectué un sondage portant sur la langue française et sur le cours lui-même. À travers l'analyse des réponses obtenues, nous avons pu constater que notre projet d'enseigner le français élémentaire dans le but d'en faire un véritable moyen de communication avait suscité un vif intérêt.

要旨

平成17年度に開設された面接授業「初歩のフランス語」は、まったくフランス語に触れたことのない学習者が5回の授業を通して発音の原則を覚え、簡単な挨拶を交わすことができるようになることを目標としている。また同時に、異文化を内包する市民社会という点において日本にはるかに先んじているフランスおよび広域フランス語圏について馴染んでもらうことで、「社会、文化、歴史に開かれたモチベーション教育」を行うことを目指している。実際の授業では、一方向的な放送授業との差異化を図り、教師と学生のふれあいを大切に、学生の反応に応じて、また時事問題などを取り入れながら、臨機応変に授業

¹⁾ 放送大学教授（「人間の探究」専攻） ²⁾ 放送大学面接授業担当講師

³⁾ 放送大学面接授業担当講師 ⁴⁾ 放送大学面接授業担当講師

を運営する方針をとっている。

こうしたヴィジョンに則って、担当講師たちがオリジナルの共通教材を制作した。「共通教材」とは、すべての教室で共有する最小限のコンテンツであり、各講師はそれをもとに自由に授業を展開することができる。今回制作したのは、カラーの図版やイラストを豊富に用いた6ページのコピー教材と、教材の例文のネイティブ講師による発音を録音した音声教材である。教材制作は授業計画に沿って行われた。授業計画において、初回と第2回は発音やアルファベットを丁寧に解説し、第3回から第5回までは「パリ」、「フランス諸地方」、「フランス語圏」をテーマにして会話練習等を行うこととした。そこで、それぞれの地域について分担して資料を集め、カラー教材に収めた。

教材の具体的な活用については、平成17年度1学期の担当講師による授業報告を参照していただきたい。

初回と最終回の授業では、フランス語および授業についてのアンケートを実施した。アンケート結果の分析によって、生きた知識を取り入れながらコミュニケーションの手段としてのフランス語の基本を学ぶ「初歩のフランス語」の試みが好スタートを切ったことが窺える。

I. 序論

1. フランス語教育の歴史的展望と「第四の道」の模索

「初修外国語」という用語を、大学に入学した時点で学び始める外国語という意味で使うことを、まずお断りしておく。「第二外国語」「第三外国語」といった重要性のランク付けを示唆する語彙は避けたいという理由からである。

限られた紙面であるが、まずわが国のフランス語教育の歴史を簡単にふり返り、みずからの立脚点を明確にしておきたい。見出しに記した「第四の道」という発想は、三浦信孝氏の明解な展望と鋭い指摘に啓発されつつ模索しているものであり、その著作『現代フランスを読む』から、議論の前提となることからの要点を紹介しておこう*。

フランス語教育はこれまでいくたびか段階的变化を遂げた。戦後1970年代までは、旧制高校以来の「文法+講読」の教育が行われ、授業内容も文学中心の教養主義に貫かれていた。1980年代からはコミュニカティブ・アプローチを導入した実用性重視の語学教育が登場し、たとえば「読む」「書く」「話す」の3つの能力を重視するという目標や、「発信型」「双方向的」といったキーワードによって、新たな方向性が示された。戦前・戦後のアカデミズムを支配してきた感のある英独仏という言語のヘゲモニーがゆらぎ、スペイン語、中国語、一足おくれて韓国語への関心が急速に高まったのも、80年代以降である。

たんに方法論が転換し、履修者数が増えたというのではない。異文化への強い憧憬と距離感がうすれ、身近な他者との直接的コミュニケーションへの願望が浮上した。戦後30数年を経て、わが国の文化状況が、質的に変化したという事実が背景にあるだろう。

ここで三浦氏は高い志を掲げ、「第三の道」と呼ぶ。「第一世代は文学偏重で現実に目が向かず、第二世代は語学偏重で批判精神に欠けるうらみがあった」と総括し、「教養主義と実用主義の遺産を十分継承しつつ、領域横断型の〈知〉とフランス語で議論ができる能力をめざさなければならない」というのである。このような「第三の道」にかならずしも遠くはない企画に、かつて筆者は係わった経験を持つのだが**、自明

のことながら、高度な目標を達成するためには、一定の教育環境が前提として求められる。

初修外国語を履修する学生は、1時間半の授業に週3回出席することが義務づけられており、さらに自由選択でネイティブの授業を履修できるというのが、そうした教育環境の一例であるとしよう。放送大学の場合、週に1回45分の放送授業を行っている。六分の一以下の時間数というハンディキャップをいかに埋めるのか。今さら旧制高校の重厚な教養主義に回帰できるはずはなく、実用主義の外国語教育では、なによりも投入する時間数や反復練習が決め手となる。多くの大学において人文系の授業の枠組みが縮小されるなかで、語学教師たちは、こうした困難と物理的限界を痛切に感じているのである。それでも初修外国語の教授法について、なんらかの方策を探し求めるとすれば、それは「第四の道」と呼ばれるものとなるはずだ。

2. 「異文化間コミュニケーション」と「モティヴェーション教育」

平成19年度から放送大学のカリキュラムに「コミュニケーション」という語彙を掲げた授業が登場する。外国語教育の立場からすれば、「言語コミュニケーション」はカタコトでも成立する。具体的な場面を思い描いていただきたい。21世紀に首都圏に住む一部のエリートが日本の国際化を先導すると思うのは幻想にすぎない。いまや異文化との接触は地域社会でこそ日常的で切実な出来事となっている。地域の産業は中央を介さずに海外とむすばれており、しかも放送大学の潜在的な学生層は、生涯学習を志す地域住民にあるはずだ。日系二世・三世やアジアあるいはアラブ系の住民は、日本のあらゆる地方に住んでいる。彼ら彼女らとの人間的なふれあいを求めるなら、まず彼ら彼女らの母国語で挨拶を交わし、その母国語の成立事情を理解し、彼ら彼女らの母国の歴史と文化状況に関する基礎的な知識をふまえ、カタコトの外国語どうして対話を試みるからこそが肝要ではないか***。彼ら彼女らは、多くの場合、英語習得の機会を持たなかった人たちだ。日本の市民社会において、流暢な英会話だけが万能なわけではない。

フランス語に関していえば、日本の津々浦々にフランス人が住んでいないのは確かだが、地球のスケールで考えれば、フランス語のカタコトによって得られる

「異文化間コミュニケーション」の機会は限りなく多様だろう。フランスは、かつての植民地帝国が変じて移民の受け入れ先となった国家である。今も広域フランス語圏が、新旧の大陸や大洋の島々に存在するのだが、それだけではない。注目したいのはむしろ、異文化を内包する市民社会のあり方を模索するという経験において、フランスが日本にくらべはるかに先んじているという事実である。いずれの地域にも、いずれの国にも、異質なものの受容をめぐり、相同の問題意識があると確認することは、異文化への対等な共感に裏打ちされた他者性の理解へとつながってゆくだろう。

どの外国語かを問うより前に、一般の市民が、いくつかの外国語のとは口に立ってみることに意義を強調しておきたい。そのとは口から、どのように新鮮な風景が見えるのか。その風景のなかに自分で踏み入ってみたいという積極的な願望を学習者が抱くよう、誘導することが肝要なのであり、これが筆者の想定する「社会、文化、歴史に開かれたモチベーション教育」である。語学的には初歩のレベルだが、生きた知識に裏打ちされ、「異文化間コミュニケーション」への土台となるような教育と言い換えてもよい。

ここで当然すぎるほどのことを確認しておきたい。今、教壇に立っている者たちにとっては、ブルーストやフローベールが、外国語習得の動機であったかもしれない。しかし生涯学習を謳う社会人教育機関で、同じ「モチベーション」が有効であるはずがない。授業のコンテンツは学習者の知的関心や生活環境を踏まえて再検討すべきだろう。教育する側は謙虚に検討を重ね、実情に即したコンテンツを開発すべきだろう。

3. 面接授業「初歩のフランス語」の共通教材

平成18年度開講の放送授業においては「フランス語入門Ⅰ」（テレビ）と「フランス語入門Ⅱ」（ラジオ）を履修することにより、2科目で初級文法がほぼ終了するというシラバスが組まれている。放送授業は一方的な授業形態であり、学習者は相当のエネルギーを自習に投入しないかぎり、満足な結果は得られないという。これは事実だろう。45分の講義を計30回、受け身に聴講しただけで、ひとつの外国語の初級レベルがマスターできるなどということは、本来あり得ない話なのである。

面接授業はインテンシヴな放送授業のサポート・システムとして構想されたものであり、なかでも「初歩のフランス語」は、まったくフランス語に触れたことのない学習者が、2時間15分の講義5回で、発音の原則を覚え、簡単な挨拶を交わすことができるようになるというところまでを目指している。その具体的な授業内容については、平成17年度1学期の担当者による「教材制作過程」と「授業報告」をご覧いただくとして、ここでは基本方針のみを記しておく。

- ・人間的なふれあいのなかで言語を習得することの楽しさを実感してもらう。教師が語りかけ、学生が答えるという授業スタイルをできるかぎり優先する。
- ・学生の反応や、時事問題などを考慮に入れて、臨機応変に授業を運営する自由度を確保する。したがって「共通教材」は、いわゆるノルマではなく、すべての教室で原則的に共有すべき最小限のコンテンツという性格づけにする。
- ・この授業が初めて開設された平成17年度において「共通教材」は、オリジナルのカラー・コピー教材とフランスで制作された地方紹介のビデオであった。図版を豊富に入れたオリジナル教材は、上述のような「異文化理解」への姿勢を前提として作成したものである。
- ・初修外国語については、面接授業のために独自の印刷教材を制作するのは、コストがかかりすぎる。一方、コピー教材は廉価であるだけでなく、学習者の反応を見ながら容易に内容を改善できる。手作りの温かみ、楽しさの演出といった効果もある。

いずれにせよ、受講者が受動的な立場におかれがちな放送というメディアとの差異化、それも教授法の差異化を図ることが、面接授業のねらいとなるだろう。平成18年度からは、オリジナルの映像教材を使用する予定であり、営為、準備を進めているが、この企画は全体構想に絡むことがらであるため次項に譲る。

4. 全体構想とDVD制作

フランス語の放送授業は、上記「入門Ⅰ」「入門Ⅱ」に加え「フランス語基礎」があり、これら3科目が同時に平成18年度に改訂になる。筆者が主として担当したのは、「フランス語基礎」であるが、その基本構想には、すでに言及した市民社会と異文化理解という2つのキーワードが内包されている。

- ・均質で統一されたフランス共和国というイメージを、多様な文化、多様な地域が、それぞれの固有性を涵養しつつ混在する土地というイメージに、積極的にシフトさせるよう試みた。市民社会とは、様々の文化的背景をもつ個人が、たがいの異質性を許容し尊重しつつ共存できる社会空間を指しているからである。
- ・言語文化という観点では、首都パリと標準フランス語を特権化しないという方針を立てた。音声メディアの特質を活かし、南仏のアクセント、ブルトン語などの地域言語、移民によるカタコトのフランス語なども、生の声として収録した。ちなみにネイティブの担当講師は、標準フランス語の話者である。
- ・前項でも指摘したように、相同の文化的状況と共有できる問題意識とを異文化のなかに見出すとい

う経験は、言語習得への有効な動機づけとなるだろう。「フランス語基礎」の放送教材では、食生活という身近な話題から出発して、NGOやNPOの活動を紹介し、企業と女性といったテーマにも触れたうえで、最後にデザインや芸術など、筆者の専門領域に遠からぬところに着地する。全体のテーマ構成が、放送大学という教育の場で筆者が模索しつつある「第四の道」へのささやかな具体例となっている。

DVD制作は、「フランス語基礎」の放送教材の構想が具体化する過程において浮上した企画である。この教材のために日仏の文化の接点で活躍する7名の方にインタビューを行ったが、これをきっかけに大学の外部に形成されたネットワークを活かし、フランスでの現地取材へと発展させた****。大西洋岸の塩田グランドと、南西部の城塞都市カルカソンヌに、若手研究者がビデオとデジタル・カメラを携えて赴き、大量の映像資料を蓄えた。これを素材に、面接授業用の補助教材を制作する。たとえば「初歩のフランス語」では、石造りの鄙びた教会をまえにしてC'est une égliseと全員で口に出して言う。その臨場感と身体感覚を大切にしながら、フランス語の初歩を習得し、併行してフランスの地方生活や日常の風景に馴染んでゆこうという企画である。

メディア教育の王道が、ITを駆使した巨大システムの開発にあるとしたら、この企画は、むしろ逆の方向をめざす。鮮明な映像や画像を収集・編集できる一定レベルの機器を備え、パソコンのスキルを元手にして、低コストで手作りの教材を簡便に生産し、人間的なふれあいを演出する補助手段にしようというのである。フランス語教育の試みが、他の言語への応用の可能性を射程に入れたものであることは、いうまでもない。放送授業の限られた枠に組みこむことが当面は困難であると思われる外国語（中国語・韓国語以外のアジアの諸言語、ポルトガル語、イタリア語など）についても、この手法を取り入れながら徐々に面接授業で実績を作るという方向をめざしたい。

念のため言い添えるなら、共通教材があれば、誰でも同質の面接授業が出来るという発想は、筆者の賛同するところではない。補助教材は道具立てにすぎず、面接授業は、教師と学生の接触こそが固有の価値なのである。そこで望まれる教師像とはどのようなものか。フランス語に堪能であるというだけでなく、何らかの専門領域をもつ研究者としてフランス文化に相対し、現地で生活者としての経験も積み、さらに批判精神をもって現代世界について語れるような人材であると定義しておこう。言い換えれば、三浦信孝氏が「第三の道」と呼ぶ教育の成果であるような人材が教壇に立ち、日本の社会が実践すべき異文化との交流とは何かを真摯に考究するときに、「第四の道」への模索が本格的に始まるはずである。

* 三浦信孝『現代フランスを読む—共和国・多文化主義・クレオール』（大修館書店、2002年、p. 343-344）

** 東京大学フランス語教材『Passages』（東京大学出版会、2001年）

*** カタカナ表記の「カタコト」という語彙は、管啓次郎氏の『オムニフォン』（岩波書店、2005年）という書物、とりわけ巻頭エッセイ「ピジンという生き方」の瑞々しい宣言を思い出しながら使っている。その「生き方」とは、制度的用語に置き換えれば、まさに「異文化間コミュニケーション」の問題であるはずだ。

**** この企画は、当初は「平成17年度放送大学特別研究」の予算の枠内で、「初歩のフランス語」のために市販の映像資料などを収集するという構想で立ち上げられた。その後、放送大学教育振興会助成金（機関助成）に申請した「フランス語圏映像資料作成」の援助を得て、オリジナルDVD制作という計画に発展したものである。（文責・工藤）

II. 教材制作過程

前節に基本方針として示したとおり、「初歩のフランス語」における共通教材は「すべての教室で原則的に共有すべき最小限のコンテンツ」と位置づけられる。各担当者は、学生の反応を見ながら、時事問題を絡めるなり、担当者自身の専門知識やフランス語圏滞在体験などを活かすなりして、共通教材の内容を自由にふくらませる。これにより、学生の状況や担当者の個性に合った、より生き生きとした授業を展開することができる。

同様に前節で示したように、平成17年度の「共通教材」は、オリジナルのカラー・コピー教材およびフランスで制作された地方紹介のビデオである。カラー・コピーであれば、カラー図版を豊富に用いた楽しい教材を廉価に制作でき、また担当者たち自身が協力して内容を決めレイアウトすることでもし出される自然な手作り感は、教室での親しみやすい雰囲気づくりにもつながっていく。

教材の内容に関しては、語学的目標としては「まったくフランス語に触れたことのない学習者が、発音の原則を覚え、簡単な挨拶を交わすことができるようになる」ことを到達点と設定し、また同時に「社会、文化、歴史に開かれたモチベーション教育」というヴィジョンに立った授業を展開するのに役立つ基礎的な資料を入れていくという方針に立って、後に述べる過程を経て具体的な素材を決めていった。

また共通教材に収める簡単な会話表現等については、ネイティブのフランス語教師に依頼して発音を録音し、担当者たちが授業で使うオリジナルCDのかたちにした。

フランス制作のビデオは、フランス各地方の文化的特色を平易なフランス語で簡潔に紹介したもので、使

いは各担当者にまかされる。その他、フランスと広域フランス語圏の社会、文化、歴史に関する基本情報、フランス語のシャンソンや映画など、担当者たちが各自の授業を展開するのに役立つ資料については、文書を作成したり、ミーティングの場で直接情報交換するなどして、より豊かな授業計画の可能性をえられるよう、情報の共有につとめた。

1. カラー教材の概要

カラー教材の制作にあたって、講師の間で以下の点を共通了解とした。

「初歩のフランス語」は、本格的な文法学習を始める前に、フランスおよびフランス語圏の社会、文化と絡めながら自然なかたちでフランス語に馴染んでもらうことを目指しており、「フランス語入門Ⅰ」への橋渡しとなるような授業として設定されている。したがって、カラー教材の作成にあたっては、初めてフランス語に触れる学生に「フランス語は難しそうだ」というプレッシャーを与えることなく、むしろ逆に、折に触れて好んで手に取りたいような教材となることを第一の目標とした。分量は数ページに抑えることとし、見出し等をカラーにしたり、イラストや写真、地図等、カラーの資料を充実させるなどして、見映えのよいものになるよう工夫することとした。各学習事項についての最低限の資料をレイアウトに配慮しつつ収載したこの共通教材は、授業の流れをゆるやかに規定する。各講師は、本教材をもとにして、必要な場合には追加資料を配付しつつ、独自の補足説明を加えていくことになる。

共通教材の具体的な内容は、5回の授業の構成について講師の間で繰り返し打ち合わせを重ねるなかで、おのずから定まっていっていった。授業構成とそれに沿った教材の制作過程は、以下のとおりである。

2. 授業計画

授業計画および教材制作にあたってまず問題となったのは、語学の初歩の授業、および、フランス語圏に関連する文化的・社会的背景の伝達という二大目標に沿って、「2時間（1回の授業は基本的に「1時間＋15分休憩＋1時間」に分割）×5回」という授業時間をどのように分割し、授業を構成するか、ということであった。すでに強調されているように、「初歩のフランス語」は文法のみを教える語学の授業とは一線を画し、フランス語が実際に用いられているのがいったいどのような地域であるのかについて具体的なイメージを持てるようにする授業であることにその独自性がある。とはいえ、「外国語」枠の授業である以上、重点はあくまでも語学スキルの習得に置かれなければならない。授業計画を立てるにあたって講師たちが何よりも頭を悩ませたのは、この問題、すなわち、語学の授業と文化的・社会的情報の伝達との兼ね合いであった。

語学の枠組みの授業である以上、両者を分けて、あ

る回は「ABCの発音」、次の回は「フランスの地理（歴史、文学、政治、等々）」の講義といったかたちを取ることはできない。どのようにしたら、フランス語圏についての情報の伝達と語学の授業とを自然なかたちで絡み合わせ、フランス語圏についての知識とフランス語が同時に身についたというような印象を受講者にもたらすことができるのだろうか。

そこで、フランス語圏を仮想的に体験しながら語学を身につけてもらうイメージで、「パリ」、「フランス諸地方」、「(フランス以外の)フランス語圏」という3つの地域を各回のテーマとして設定することとした。

すなわち、5回のうち最初の2回については特にテーマを設けず、ABCの発音や自己紹介などの語学の基本を4時間かけてじっくり教える。

そして、第3回から第5回までは、上記のテーマにゆるやかに沿うかたちで語学学習と文化紹介を兼ねた授業を行う。たとえば第3回であれば、映像を視聴するにせよ、シャンソンを聴くにせよ、カフェを舞台にした会話練習をするにせよ、その回の全体が何らかのかたちで「パリ」をめぐる、ということである。この構成の利点は、「場」として設定された広いテーマのもとで、各講師がそれぞれの専門分野や興味関心等に即して自由に授業を組み立てることができることである。時事問題や、歴史、文化、といった話題は、その「場」に関係する限りで、各講師がそのつど組み込んでいけばいいわけである。このような次第で、5回の授業は次のように構成されることとなった。

第1回 授業趣旨説明、語学基本（ABC発音、挨拶など）

第2回 語学基本つづき（挨拶、自己紹介など）

第3回 テーマ：パリ

第4回 テーマ：フランス諸地方

第5回 テーマ：フランス語圏

3. 資料収集

以上の授業計画をもとに教材作成にむけた資料収集と情報交換が開始された。

まず、上記のフランス制作による地方紹介ビデオを共有できるかたちにした。この作業は南が行った。また、今回の授業では使わなかったが、今後授業で使える可能性のあるフランス・フランス語圏の地理と文化にまつわるAV教材の調査を南、笠間で行っている。

次に、以下のとおり分担を決め、各自が教材用に資料（地図、写真等）を収集し、また、授業に盛り込むのが望ましいと思われる事項や参考文献等をレポートにまとめた。資料は、教材に使われない場合でも全員で共有し、授業に役立てることとした。分担は以下のとおり。綴りと発音：近江屋、パリ：郷原、フランス諸地方：南、フランス語圏：笠間、フランスの歴史（年表）：井上。このうち「綴りと発音」については、アルファベットおよび綴り字記号の表は共通教材の冒頭に掲げるが、細かい規則は複雑であり、「複合母音

字」等の用語もとっつきにくい印象を与えるので、コピー教材には含めず、自習用のプリントとして最終回に配布することとした。

また、授業で使えるような音楽資料を各自持ち寄り、情報を交換した。一方では語学学習の一環として利用できるような、馴染みやすい、あるいはすでに多くの人に馴染みのあるメロディーで、歌詞が易しく、初修者にも聴き取りやすいシャンソンなど、他方ではパリやフランスの各地方、広域フランス語圏というテーマに絡めるかたちで用いることのできる地方民謡やライ(マグレブ系移民を中心に聴かれるアルジェリア発祥の歌謡曲ジャンル)、クレオール語の歌など。この作業は主として笠間、南、近江屋が担当した。

教材に含めるべき語学的事項については、担当講師の間で授業案を持ち寄って意見を述べ合ったり経験談を聞いたりしながら決めていった。じっくり時間をかけて基礎を確実に身につけてもらうことを重視するため、当初盛り込む予定であった「日本語になったフランス語」(オードヴル、アンケート、等)のリストやシャンソンの歌詞等は、共通教材からは除き、必要な場合には各講師が適宜、追加資料として配付することとした(音声資料については5を参照)。

4. カラー教材作成

前記の分担によって集められた資料を基盤として、挨拶や簡単な単語・表現の選択については井上、南、笠間で調整を行い、担当者の撮影した写真をふくむ図版を加えたいうで、笠間がレイアウトし、南がカラー・コピーの原版を印刷した。語学ページのイラストも笠間が担当した。全体の構成としては、ほぼ各回に1ページずつ進むかたちになっており(実際には、第3回から第5回の授業でも1~2ページに戻って文法や表現を学ぶのではあるが)、最後に参考資料が付された6ページのカラー教材となった。具体的には以下のような内容で構成されている。

1 ページ

- ・アルファベット：アルファベット26字(大文字・小文字)と発音記号
- ・綴り字記号：アクサン・テギュ、アクサン・グラヴなどの綴り字記号と例となる単語を並べた表
- ・挨拶：教師と学生たちという設定での、出会い(「こんにちは、皆さん」「お元気ですか」と別れ(「さようなら、皆さん」「また来週」)の挨拶
- ・自己紹介：基本的な自己紹介の例文(「私の名前はマリコです」「あなたのお名前は?」「私は学生です」「私は東京出身です」)

2 ページ

- ・簡単な表現：「こんばんは」「すみません」「どういたしまして」「ありがとう」などの日常的な簡単な表現

- ・数：1から12までの数をフランス語で
- ・カフェにて：カフェに入ってコーヒーを注文して受け取るまでの簡単な会話
- ・その他の表現：主にカフェやレストランで用いる表現(「これはおいしい」「お勘定お願いします」「トイレはどこですか」)および単語(コーヒー、ビール、ワイン等)(イラスト付き)

3 ページ

中央にパリ全体のカラー地図(名所がフランス語で書き込まれている)、それを囲むかたちで、地下鉄ホーム、地下鉄入口、リュクサンブール公園、市庁舎、中国旧正月の祝いの様子、ベルヴィル市場の写真(フランス語のキャプション付き)

4 ページ

中央にフランス全土のカラー地図(各地方がフランス語で書き込まれている)、それを囲むかたちで、エトルタ(ノルマンディー)、シャンボール城(ロワール)、コルマル(アルザス)、ミヨー橋(ラングドグ)、ラヴェンダー畑(プロヴァンス)、アルプスの写真(フランス語のキャプション付き)

5 ページ

中央にフランス語圏のカラー地図(フランス語を母語とするか公用語とするか等によって色分けされている)、それを囲むかたちで、ケベック(カナダ)、ブリュッセル(ベルギー)、ポルトランス(ハイチ)、マラケシュ(モロッコ)、ホーチミン(ヴェトナム)、ダカール(セネガル)の写真(フランス語のキャプション付き)

6 ページ

- ・フランス略年表：「481年 クロヴィス、フランク王となる」から「2002年 EU通貨『ユーロ』流通開始」までの略年表
- ・ヨーロッパのカラー地図(EU加盟国であるか否かによって色分けされている)

5. 音声教材作成

次に、出来上がった印刷教材をもとに音声教材(CD)の作成に入った。音声教材は、印刷教材に載せた文を含め、授業で練習する会話や表現をネイティブの発音で吹き込んだものである。

録音にあたっては、放送大学客員教授のエストレリータ・ヴァセルマン先生に発音を依頼。初修者むけにゆっくりと読みあげたものを担当講師たちがMP3ファイルとして録音したうえで編集を行い、それを南がCDのかたちにして各人に配布した。内容は以下のとおりである。授業の始めと終わりの挨拶、自己紹介、さまざまな職業名、簡単な表現、12までの数、カフェでの表現、その他の表現、カフェで注文する品の名前(コーヒー、ビール等)、日本語になったフランス語

(料理・服飾・その他)。

以上に示したような過程を辿り、「初歩のフランス語」の共通教材が作成され、またこれを基本として各担当者が自由に授業を展開するにあたって共有されるべき情報と資料が整った。それらが実際にどのように活用されたかについては、後掲の授業報告を参照していただきたい。(文責・笠間、郷原)

Ⅲ 授業報告

○世田谷学習センター(集中型授業)

2005年8月6日(I~Ⅲ限)、8月7日(I~Ⅱ限)

担当講師 工藤 庸子、井上 のぞみ

第1回:ABC

始めに授業の主旨や集中型授業の特殊性について簡単な説明を行った。続いて実施した初回アンケートによると、全くの初学者は全体の3分の2強であった。

授業の導入として、世界地図上でフランスの領土やフランス語圏の広がりを確認した後、ABCの発音練習を行った。CD教材を聞かせると同時に、発音方法を説明しつつ講師の口の動きに注意を促し模倣させた。「r」などの発音しにくい音や、「b」と「v」などの間違いやすい音を集中的に反復練習した。続いて簡単な単語や略号のABC読みによる書き取り・発音を行った。また、主な国際機関のフランス語式略号を板書して意味を類推させ、関連して、年表を用いて世界におけるフランスの特殊な政治的立場を解説した。気分転換にアンティル出身の歌手の曲を聴いてフランス語の音に触れた後、自分の名前をアルファベットで綴らせて二人一組でABCの発音確認をしてもらった。

第2回:挨拶・自己紹介

まず、始めの挨拶の発音練習を通して、リエゾンやアンシユマンを含めた綴りと発音の間の主な諸規則を確認した。続いて「日本語になったフランス語」(食)をCDで流して何と聞こえるかを受講者に訊ね、正解を板書して意味の由来等を解説した後、日本語との「音」の違いを意識させつつ全員で発音した。

次に童謡「J'ai perdu le "do" de ma clarinette」を聴き、サビや音階の発音練習をした。「au pas camarade」の意味説明をすると、皆驚きと納得の反応を示していた。

続いて自己紹介の練習を行った。「Vous vous appelez comment? -Je m'appelle***」の聞き取り・発音を繰り返した後、二人一組で練習してもらった。フランス人に名前を日本風に発音してもらう為には綴り方に工夫が必要なことを説明すると(Masayo→Massayo等)、多くの受講者から自分のケースについて質問が上がり、綴りと発音の関係に対する関心の高まりが感じられた。続いて職業と出身地に関する表現を全員で発音練習し、再び二人一組になって互いにトータルな自己紹介をしてもらった。最後に終わりの挨拶

の発音練習を行った。

第3回:パリ

19世紀前半までの無秩序で不衛生なパリの実態に言及した後、オスマンの「パリ大改造」について図版等の資料(個人で準備)を用いて簡単に説明した。続いて、カラー教材や映像を用いて現在のパリとその近郊についての概観的説明を行った。主な建築物やキーワードはその都度板書し全員で発音した。新旧の建築物の混在と調和、革命記念祭と都市計画、歴史的建造物の現代的利用による再生の試みを中心に解説し、政府主導の様々な文化社会的イベントの紹介も行った。

続いて1~12までの数の発音練習をした。その際、数字における綴りの特殊性にも注意を促した。

気分転換も兼ねて南仏の映像を見せ、パリとの違いを建物の特色や海の色から実感してもらった後、最後にカラー教材のカフェメニューを全員で発音練習した。終わりの挨拶の後、翌日のテスト範囲の説明を行ってその部分を宿題とし、一日目は終了。

第4回:日常的表現・フランス諸地方

前日の復習として、ABC、自己紹介、数字その他の表現について全員で数回発音練習を行った。その後、カラー教材の「カフェでの会話」を全員で発音し、次に二人一組になって役割を入れ替えながら練習させた。その他簡単な挨拶表現を練習しながら、フランスにおける日常的挨拶の重要性を強調し、また礼儀作法や常識、公私の意識の日仏間での違いについて説明した。

続いてフランスの諸地方について、カラー教材、音楽、映像、その他個人的に準備した資料を用いて概観し、地名やキーワードはその都度板書して全員で発音した。ブルターニュ、ラングドック、プロヴァンス、アルザスの4地方を中心に、各地方の文化的特色や主要産業紹介の他、EU問題と絡めて「アンチ・グローバルイゼーション」の動きにも言及した。また、ブルトン語やオック語など地方語復興運動にも焦点を当て、地方語で歌うミュージシャンの音楽等を紹介した。

第5回:フランス語圏

始めに「Sur le pont d'Avignon」を聴いて歌の由来を説明し、リズムをつけてサビの発音練習を行った。皆積極的に声を出していた。続いてテストを行った(ABC書き取り、数字、カフェメニューの正しい綴りの選択、自己紹介)。全体的によい出来であったが、ABC書き取りは結果に多少のばらつきが出た。

その後、フランス語圏についてカラー教材等を用いて概観的説明を行った。続いて、本国への旧植民地からの移民問題(HLMやbeur等)を歴史的背景に触れながら解説し、関連してライ(« tellement n'brick »)を聴いた。さらに、アンティル諸島やレユニオン、ハイチ、そして井上が訪問経験のあるコート・ジボアールについて、音楽や写真・映像等の資料を用いて紹介し、各国・地域のクレオール文化の特色や、植民地主

義の傷跡、政情不安の実態などを解説した。

最終回アンケートによると、受講者の満足度は高く、皆概ね達成感を感じたようである。集中型授業ゆえの負担を減らすために音楽や映像を多用する一方、学習内容を必要最低限に絞る工夫が功を奏したと考えられる。なお、工藤は1・3・5回目に参加した。

(文責・井上)

○埼玉学習センター

2005年5月8日～6月12日、毎週日曜Ⅳ限

担当講師：青山昌文、近江屋志穂

第1回：アルファベット

受講者の大半が初心者である。そこでフランス語という言語について持っているイメージを尋ね、その後フランス語の音声の特徴について解説した。次に、アルファベットの発音練習を行う。発音が難しい文字は、R、U、Wであった。フランス語の最も特徴的な音の一つである[r]についてはその出し方を丁寧に説明し、何度も練習を行った。さらに、受講者に自分の名前をアルファベットで発音してもらった。続けて、よく使われるフランスの略号の読み方を全員で発音練習した。

その後、カラー教材をもとに、授業の最初と最後に毎回行うフランス語の挨拶のしかたを練習した。受講者はまだ読み方をカタカナでふっている段階であるが、質問が出たこともあり、複合母音字やリエゾンの説明もした。最後に日本語になった身近なフランス語の単語をCDで聞き、何と聞こえるかを尋ね、日本語読みとフランス語読みの違いに注意を喚起した。また、その中のいくつかを板書し、綴りと発音との関係に再度言及した。

第2回：自己紹介

始めの挨拶、先週の復習に続いて、自己紹介のしかたを学ぶ。テキストを見ずに「私の名前は～です」の言い方を覚え、「あなたの名前は？」を練習し、二人組で自己紹介し合った後、数組が発表した。その後、カラー教材で綴りを確認し、あらためて発音練習した。さらに職業のフランス語一覧を配布し、名前に続けて職業を言えるように、意味の確認と発音練習をした。そしてフランス語では女性名詞と男性名詞を区別することを説明した。

次に、1から12までの数を覚えた。テキストを見ずに言えるようになるまでには多少時間を要した。また、フランスでは街で「Vous avez l'heure?」と尋ねられることが多いこと、時間は「Il est～heures」と表すことを説明した。

受講者からの希望もあり、この回からシャンソン「Plaisir d'amour」を歌うことにする。さびの発音練習を行い、その部分を板書し、いくつかの音と綴りの関係を強調した。

第3回：パリ

始めの挨拶では、鼻母音に注意して発音するよう求めた。数の復習の後、パリの地理や歴史について、映像や写真を見せながら解説した。また、華やかなイメージの一方、フランスは深刻な失業問題を抱えていることを説明した。作家の日記の一節から、パリの地下鉄や街中に見られるホームレスの様子を読み取った。

次に、カフェでの注文のしかたを学んだ。食べ物の発音練習をするときは、冠詞をつけるようにした。まず二人組で練習し、次にあらかじめ用意した食べ物の絵のコピーを用いて、ウェイター役と客役に別れて会話を実演してもらった。最後にシャンソンの続きを練習した。

第4回：フランスの地方

始めにフランスの県・地域圏・海外県の区分を説明した。それからカラー教材に写真のある六つの地方について、映像も見ながらそれぞれの特色を解説した。さらにフランス語の成立ち、及び現在話されている地方語について述べた。国家統一のためにフランス革命以降20世紀半ばまで禁止されていたいくつかの地方語が、多言語主義政策の中で、学校でも教えられるようになったことを説明した。

次に、フランス語の買い物のしかたを学んだ。カラー教材の表現及び洋服の語彙を用いた会話パターンのプリントを用意し、それに従って二人組で店員と客の会話を練習した。買い物合計金額も出し、フランス語で発音した。その際、100までの数の数え方を解説した。

この回では半母音に注意しながらシャンソンの歌詞の発音練習を行った。

第5回：フランス語圏

まず、フランス語圏の広がりを世界地図で確認した。また、植民地主義の歴史と独立運動の経緯、クレオール世界の形成について概説した。ここでマルティニクのリズムとヨーロッパの音楽が融合したKaliの音楽を聴いた。また、植民地独立後のフランス社会で見られる問題として、アルジェリア系移民への雇用差別、及び「宗教シンボル禁止法」の記事を取り上げた。

試験実施前には、CDを使い、これまでに学んだカラー教材のフランス語の総復習を行った。最終試験には、数の聞き取り、シチュエーション別会話の正誤確認、重要表現の日本語訳を出題した。受講者全員が無事合格した。最後にplaisir d'amourを一曲歌うことができた。毎回の授業休憩時に流したシャンソンも好評であった。最終アンケートでは、楽しくフランス語を学べたという意見が多く見られた。

尚、青山は初回と最終回に参加した。

(文責・近江屋)

○世田谷学習センター

2005年5月7日～21日、土日Ⅱ限

担当講師 工藤 庸子、笠間 直穂子

第1回：ABC

前半：初回アンケートの実施。単位取得の要件を説明、大まかな授業の流れを述べる。共通教材を使ってアルファベットの発音練習。綴り字記号の説明、つづりと読み方との関係についての解説、発音練習。アンティル諸島の自然と文化を紹介するフランス語のビデオを見ながら、フランス語の発音に耳で慣れるとともに、フランス語圏のひろがり、およびその植民地主義の歴史とのつながりを示す。

後半：共通教材を使って、授業開始と終了の挨拶を練習。アンティル出身の歌手アンリ・サルヴァドールの「Chambre avec vue」(2000)を聴く。あえてこの時点では歌詞の説明をせず、最終回に再聴するさいに歌詞を解説するものとする。

第2回：自己紹介

前半：共通教材を使い自己紹介の解説と発音練習。リエゾンについて説明。担当者共通の音声教材を使って、さまざまな職業名を紹介する。単語の性について解説。アニメ映画『キリクと魔女』(1998)冒頭部分を見て、「私の名前は…(Je m'appelle...)」の使用例を確認するとともに、アフリカを舞台とする当作品の意義と問題点に触れる。

後半：共通教材「かんたんな表現」の解説、発音練習。続けて数の発音を練習。「1足す1は(Un et un)?」「2(Deux)」と足し算をさせるかたちで何人か指名して練習したのち、ドキュメンタリー映画『ぼくの好きな先生』(2002)を見る。まず冒頭部分、ついで農家の子どもが母親と算数の宿題をする場面を見ながら、数を聞きとる練習をするとともに、オーヴェルニュ地方の過疎地の雰囲気を見る。

第3回：パリ

前半：初級向け辞書について説明。パリを紹介する映像を見る。共通教材のパリ地図を参照しながら、登場する地域・建築物の名称と位置を確認。プリント(個人で用意)を使って、「私は～に行きます(Je vais à...)」等を発音練習。パリ市長を画像で紹介。ジャック・デュトロンの曲「Il est cinq heures, Paris s'éveille」(1968)を聴き、解説。

後半：共通教材「カフェの会話」を解説、発音練習。続けて「その他の表現」および飲食物について解説、発音練習。

パリ紹介の補足。パリ郊外の地図を見せつつ、低所得層向け高層公営住宅地(HLM)の問題について解説。アルジェリア系移民二世で、HLM地帯であるマント＝ラ＝ジョリに育ったライ歌手フォデルの「Tellement n'brick」(1997)を聴き、アラビア語とフランス語の混在、マグレブ系移民文化に触れる。

第4回：フランス

この回は、フランス語を続けて長く聴く体験を与えるとともに、フランスのさまざまな地方の多様な生活と文化を感じてもらおう目的で、各地方を紹介したフランス語の映像を見せ、一地方ごとに、共通教材のフランス地図を使って県庁所在地を確認し、各地の名所・名産で重要なものを配布プリントに書き出して、つづりと発音を教え、解説した。とくに注目したのは、ブルターニュ地方ロリアンのケルト文化フェスティバル、ラングドック＝ルシヨンのオクシタン語復権運動、コルシカ島など。

多様性を重視して全地方を紹介することを目指した結果、やや駆け足の授業になったため、最終回アンケートによれば、フランス一周旅行をしているようで楽しかったという意見があったいっぽう、この回のみスピードが少々速すぎる印象をもったという学生もいた。次回の授業計画に活かしたい。

第5回：フランス語圏

前半：前回の補足として、フランス大統領、首相を画像で紹介。共通教材の世界地図を使って、フランス語圏の全体像について解説。ついでグルジアを舞台とするフランス映画『やさしい嘘』(2003)冒頭部分を見る。植民地支配に端を発する仏語圏とは別に、かつての帝政ロシア影響圏の上流階級における仏語文化の浸透と、それが共産主義時代を経た現代グルジアにおいて複雑なかたちで生きているさまを確認。作品中に登場する文学者アポリネール、プルーストについても一言紹介。

後半：初回に聴いた「Chambre avec vue」をもう一度聴き、歌詞の発音と意味を解説し、全員で歌ってみる。試験実施。全体のまとめ。継続的なフランス語学習を勧める。最終回アンケート実施。

なお工藤の参加は初回と最終回のみで、授業計画は笠間が立てた。(文責・笠間)

○文京学習センター

2005年5月7日～6月4日、毎週土曜Ⅳ限

担当講師 鈴木 啓二、郷原 佳以

第1回：発音の規則・ABC

始めに共通アンケートを実施したところ、まったくの初修者もいたが、放送講座や教科書で学習を始めたが難しかったために受講したという学生も多かった。それを承けて、本授業が本格的な文法学習への導入となるべく設けられたことなど、今後の授業方針を伝えた。

1時間目ではまず、辞書や施設等々、フランス語学習に役立つ情報を一覧にして配布した。次に、フランス語に特徴的な母音の発音について解説し、実際に発音練習をした(以上、鈴木担当、以下は郷原担当)。

自分の名前をローマ字で書いて机の上に出しておいてもらい、2時間目にはフランス語のABCの発音、

および綴り字記号について解説した。CDを用いて発音練習をし、自分の名前および綴りをフランス語式に発音できるようにした。次に、「Je m'appelle ***」(私の名前は～です)のかたちで名前を伝える練習をし、最小限の自己紹介ができるようにした。最後に、出会いと別れの挨拶を紹介し、今後は授業の最初と最後にフランス語で挨拶をすることとし、さっそく挨拶を交わして終了した。

第2回：挨拶・自己紹介

前回紹介した出会いと別れの挨拶の全文を板書し、特に発音に気をつけながら一語一語詳しく解説した。その際、例文「Vous allez bien?」(お元気ですか?)を用いてリエゾンについて説明し、同時にエリズイオン、アンシェヌマンの用法についても説明した。CDを聴き、講師と受講者および受講者同士の間で挨拶練習をした。

次に、さらに進んだ自己紹介ができるように、名前、職業の伝え方と尋ね方を説明し、さまざまな職業名も紹介したうえで全員に自己紹介してもらった。続いて、出身地、趣味の伝え方と尋ね方、「彼(女)は～です」と紹介する表現も説明し、以上すべてについて、講師と受講者および受講者同士の間で繰り返し練習した。最後にシャンソン「C'est si bon」を聴いた。

第3回：パリ

導入として、パリがフランス政府の文化・芸術活動への積極的な関与を表す都市であることを具体的に話し、受講者の感想を聞いた。次に、パリの面積、人口、地形等のデータを東京と比較しつつ紹介した。続けて、パリの映像を見せ、シャルル・ド・ゴール空港に到着してからパリの主要名所を回るようなつもりで、各所(交通網、エッフェル塔、セーヌ川、ルーヴル、オペラ座、等々)について解説した。そのつど共通教材の地図で場所を確認し、パリの地形が少しずつ頭に入るよう心がけた。歌詞を配り、パリに関わるシャンソン「Il est cinq heures, Paris s'éveille」も聴いた。

次に、パリのカフェに行ったつもりになって、共通教材の例文をもとに、講師がカフェのウェイター、受講者が客となって会話練習をした。

第4回：フランス諸地方

始めに、最終回の小テストについて予告し、自己紹介の仕方を覚えてくることとした。

次に、まずフランスの県と地域圏、および人口などのデータを紹介した。続けて、受講者の希望を聞いて4つの地方を選び、それらの地方についての映像を視聴した。第3回と同様、そのつど共通教材の地図で場所を確認するようにし、また、適宜、各地方の特色等について解説をした。キーワードはすべて板書し、地名や料理名等、特徴的な綴りについては発音練習も行った。サヴォワ地方とブルターニュ地方に関わる音楽も聴いた。

共通教材をもとに、感謝や謝罪を表す日常的な表現について、会話練習を行った。

第5回：フランス語圏

フランスでのEU憲法否決の直後であったため、新首相ド・ヴィルパンを簡単に取り上げ、彼がモロッコ出身であることからマグレブ三国の話題への導入とした。

次に、フランス語圏の概要について改めて説明し、共通教材の地図および補足的な配布資料を参照しつつ、各地域の植民地化および独立の経緯について説明した。さらに、植民地の歴史に関連して起こった諸現象(セティフ暴動、スカーフ問題、ネグリチュード、クレオール、マグレブのフランス語文学)について概説した。クレオール語の歌なども聴き、具体的に実感できるようにした。

続けて、発音に気をつけつつ、1～12までの数を覚え、時間を尋ねる会話練習をした。

最後に試験およびアンケートを行った。授業中に繰り返し練習した甲斐あって、全員がほぼ満点に近い成績で合格した。本授業の受講によって、今後のフランス語学習への意欲も十分に高められたようであった。

(文責・郷原)

○多摩学習センター

2005年5月25日～6月22日、毎週水曜Ⅲ限

担当講師 原和之、南玲子

第1回：ABC

授業方針の説明に続けて初回アンケートを実施した。アンケートからは、初学者が大半を占める一方で既習者も少なくなく、受講者のレベルにかなりのばらつきがあることが把握できた。

実際の授業は、世界地図を用い、フランスの国土、フランス語使用地域の広がり、そしてフランス語の起源を確認するところから始めた(以上、原が担当。以下最終試験まで南が担当)。

次にセリフのある映画音楽「Un homme et une femme」を流し、受講者に感想を尋ねながらフランス語の音声の特徴を解説した。そこで具体化されたイメージを念頭に置いて、フランス語のABCの発音練習を始めた(すべての授業で発音練習には今回作成したCDを利用した。パソコンを使うと再生速度を変えられるのが便利だった)。慣れてきたところで受講者を指名しながら、間違いやすい文字や、ニュースで耳慣れた略号を選んで書き取りや発音を行った。

最後に、出会いと別れの挨拶を軽く練習した。

ABCの発音を復習することを宿題とした。

第2回：自己紹介

前日にEU憲法批准の是非を問う国民投票の結果が出たことを受け、フランスの政治状況の解説をした。政党名などの略号が出るたび発音を尋ね、ABCの復

習を兼ねるよう留意した。

挨拶の表現に戻り、リエゾンや母音の間の«s»が濁ることなど、つづりと発音の規則をじっくり確認しつつ発音練習をした。

次に、共通教材で自己紹介の表現を学んだ。二、三人ずつ組んで会話練習をしたおかげで、全体の雰囲気が和やかになった。さらに職業名のフランス語一覧（個人作成）を配布し、発音と日本語訳を確認した。また、男性と女性についてそれぞれ別の名詞があることに言及した。

« Bonjour. Je m'appelle ***. Je suis ***（任意の職業）. Je suis de ***（任意の出身地）. Au revoir. » の五つの文章の書き取りと発音を宿題とした。

第3回：パリ

宿題を書き取り各自で答えあわせをしたものを「台本」として持ち、少人数に分かれて、挨拶から自己紹介までの会話を練習した。

続けて1から12までの数を覚えた。

次に共通教材やフランスで作成された映像を参照し、パリとその周辺のイル・ド・フランスの地名を発音した。とりわけ首都の地理や歴史に関する基礎知識については十分に確認した。

最後にカフェでの会話を取り上げた。共通教材に記された食物の名詞に不定冠詞をつけながら、男性名詞と女性名詞についても説明した。ひととおり発音ができるようになったところで、受講者を指名し、店員と客との会話を練習した。

いくつかの数字および« Monsieur. Madame. S'il vous plaît. Merci »の書き取りと発音を宿題とした。

第4回：フランス

宿題の書き取りに続き、前回のパリ解説の補足としてシャンゼリゼ大通りを取上げ、« Aux Champs-Élysées »の歌を聴いた。配布した歌詞（個人作成）を皆で読み上げてからリズムにあわせて発音した。さらに音程をつけて歌ってみたところ、女性を中心に声がよく出ている。

次に共通教材を用いて、行政上の区分や歴史などフランスの基礎知識を確認するとともに、地名を発音しながらフランス各地の特色を見ていった。なかでもフランス革命後の中央集権化とそれに対抗する地方語復興運動に注目し、ブルターニュとラングドックの映像を視聴した。

最後は共通教材「いろいろな表現」を中心に会話練習を行った。受講者間の得手不得手の差が開いてきたので少人数での会話練習を断念し、語彙を増やすことに専念した。ここでは日本語化したフランス語（食）や、郷土料理を盛り込んだメニューのプリント（個人作成）を用いた。

新しい宿題は出さず、最終試験に備えて勉強すべき箇所を指示した。

第5回：フランス語圏

前回のメニューのプリントを使い、発音規則を再確認しながら店での注文の仕方を復習した。

次に共通教材を用いて、フランス語圏の拡大に関する歴史的経緯やフランス語圏を支える組織（OIF、APF）について解説をした。またフランスの郊外問題や旧植民地からの移民問題と関連づけ、フォデル« Dis-moi »を聞いた。

残りの時間を使って、日本語化したフランス語（服装・芸術）を耳で聞いて当てたり、受講者の希望を受けて100までの数の体系を紹介したりした。試験直前には会話の総復習を行った。

最終試験では数の聞き取り、職業名の書き取り、つづりの正誤確認を行った。出来はかなり良く、受験者全員が合格した。最終アンケートの結果はほぼ好評だった。受講者に対して語学の継続学習の大切さを強調して終了した。（文責・南）

IV. アンケート結果

「初歩のフランス語」では開講されたすべての学習センターにおいて、初回と最終回に、受講者全員に対する共通アンケートを実施した。一学期分のデータだけしかない今、我々はまだ本格的な分析を行える段階にはない。しかし初修外国語教育について学生の生の声を伝えるため、ここでひとまず、最初の「初歩のフランス語」の受講者による授業評価を展望しておきたいと考える。

1. 初回アンケート

初回のアンケートは、受講者の興味の所在や語学経験の有無を知り、講義に対する具体的な要望を把握するために実施した。設問は、「どうしてこのクラスを選んだのですか」「このクラスで何を学びたいのですか」「フランスと聞いて何をイメージしますか」「フランス（語）に関する経験があればお書きください（語学学習、旅行経験など）」の四つである。

その結果を見ると、授業に期待することとしては、「フランス語Ⅰ」よりも簡単な文法や日常会話といったいわゆる語学学習の要素と並んで、語学の背景にあるフランスおよびフランス語圏の文化全般という回答も目立った。フランスのイメージとしては歴史上の出来事や有名人の名前を挙げたり、「おしゃれな感じ」といった非常に漠然とした答え方をしたりするものが多く、画一的かつ表面的だった。また4割近くの受講者がテレビやラジオの放送講座、市民講座など、なんらかの形でフランス語の学習をすでに経験していたことが判明した。放送大学の「フランス語Ⅰ」さらに「フランス語Ⅱ」をすでに履修したケースも散見された。ただ手をつけても挫折してしまったり、毎回入門程度を繰り返したりする人たちも少なくなく、新しい身につく学習法が知りたいという声もあった。

2. 最終回アンケート

最終回のアンケートは、最終試験に続けて行われた。授業について、選択肢に丸をつける形式の設問「授業の速度はいかがでしたか」「授業の難易度はいかがでしたか」「授業はどれくらい役に立ちましたか」のほかに、要望や感想を自由に記入する欄を設けた。なお、回答者（単位取得者）109名の専攻別の割合は、図1のとおり、「人間の探究」28%、「発達と教育」26%、「生活と福祉」21%、「社会と経済」9%、「自然の理解」6%、「産業と技術」3%、「不明・選科生」7%となっている。「初歩のフランス語」を選択し試験を受けた受講者の4分の3を「人間の探究」、「発達と教育」、「生活と福祉」の学生が占めていたことになる。

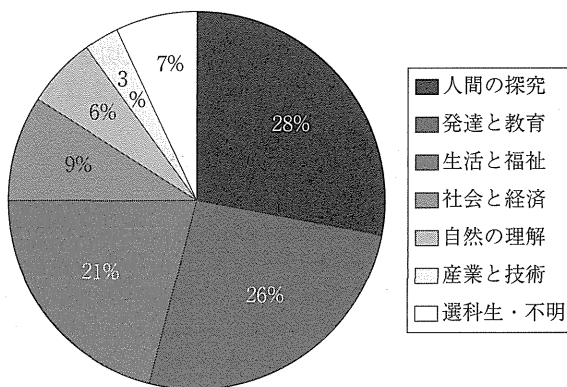


図1 (専攻別回答者の割合)

授業の速度について「遅すぎる」「ちょうどいい」「速すぎる」のいずれかを選んでもらったところ、図2のように、「ちょうどいい」が85%以上の圧倒的多数を占めた（以下、図2～4の数値は有効回答の数を表す。なお、いずれも選択せず留保のコメントをつけた人の数は表には反映させていない）。

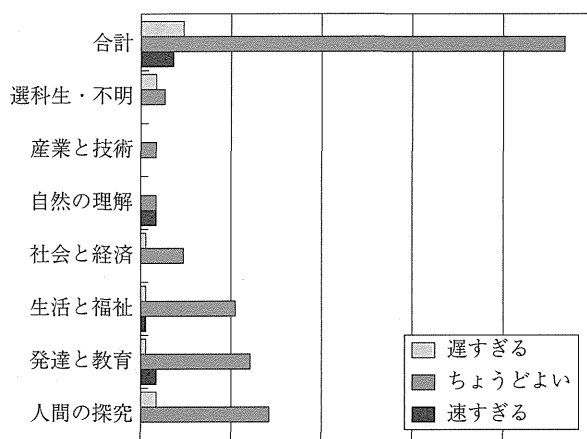


図2 (速度)

次に授業の難易度について「簡単すぎる」「ちょうどいい」「難しすぎる」のいずれかを選んでもらったところ、図3のようになった。速度に比べてややばらつきが見られるものの「ちょうどいい」が77%を占めた。速度に関する調査結果からも推測できることだが、

受講者の3割近くを占めている「人間の探究」の学生は、いわゆる人文系の学科に興味のある人が多いためか、速度、難易度ともにより高度な授業を希望する声が比較的多い。選科生も、フランス語を特に選択しているせいも、同じ傾向にある。それに対して、他の専攻に属する学生は難しすぎると感じることもあったらしい。その他、どれにも丸をつけず「どちらかといえば簡単」「どちらかといえば難しい」という選択肢がほしかったというコメントが4名からあった。

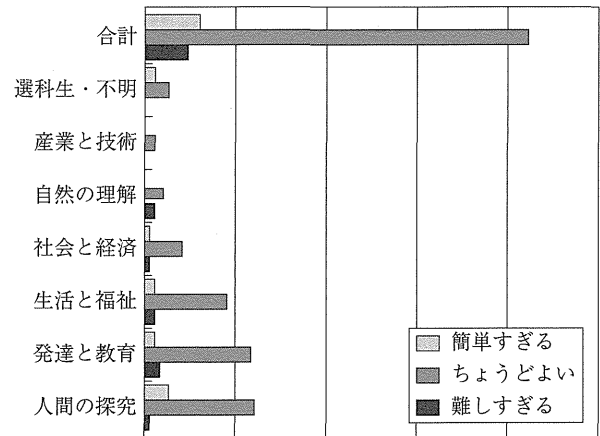


図3 (難易度)

また図4に示したように、「授業は役に立ちましたか」という設問に対しては、「とても役立った」が50%、「それなりに役立った」が45%にまで達した。その他、いずれも選ばず留保をつけた受講者が3名いたが、皆、「日常的にフランス語に接していないので役立てることはできない」とコメントしており、語学授業として効果があがったかどうかと関係なく、フランス語が実生活に応用できるかどうかを重視して回答したと思われる。

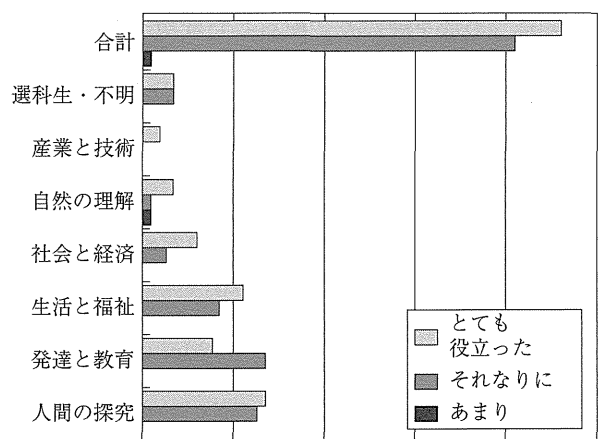


図4 (効果)

自由記入欄には、「カラー教材が充実していてよかった」「語学だけでなく文化的情報・教養を学ぶことができてよかった」というコメントが目立った。また、速度や難易度について注文をつけた受講者層でも、授業全体を振り返って「とても役立った」に丸をつけた

り、授業が楽しかったとコメントを書いたりする人が多かった。到達点の設定に多少の不満があったとしても、フランスやフランス語圏の現在を伝えるような素材を用いながら語学学習を進めるという方法に対しては、全体として高い評価が得られたと考えてよいだろう。

いわゆる必修の語学を負担に感じる学生、義務として受身で出席する学生はこれまで少なくなかったかもしれない。特に語学は得手不得手が分かれやすい科目でもある。しかし今回のアンケート結果がおおむね好評であるのみならず、「フランス語を続けたいと思えた」「自分の口からフランス語が発音されることに感動した」というコメントが多く受講者から出ていることを考えると、言葉話す人々の営みを思い浮かべながら、コミュニケーションの手段として機能するフランス語の基本を、対面学習の場で丁寧に学ぶという「初歩のフランス語」の試みは、ひとまず好スタートを切ったといえるだろう。(文責・南)

「平成17年度放送大学特別研究」の研究組織は以下

の通りである。

工藤 庸子 (研究代表者：放送大学教授)

笠間 直穂子 (研究補助員：放送大学面接授業担当講師、日本学術振興会特別研究員、立教大学非常勤講師)

南 玲子 (研究補助員：放送大学面接授業担当講師、東京大学大学院教務補佐員、東京大学大学院博士課程)

郷原 佳以 (研究補助員：放送大学面接授業担当講師、日本学術振興会特別研究員)

なお、この研究組織に名を連ねてはいないが、以下の2名の方は、「教材制作過程」からも明らかなように、教材開発や情報交換に積極的に参加し、企画の立ち上げに貢献してくださった。その経緯を踏まえて「授業報告」の執筆を依頼したものである。

井上 のぞみ (放送大学面接授業担当講師、立教大学非常勤講師)

近江屋 志穂 (放送大学面接授業担当講師、埼玉大学非常勤講師)

(平成17年11月7日受理)